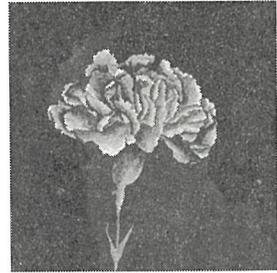


想

随



カット・谷川修三

ナポリからの

手紙

西尾 昭

通関料九〇円なりを支払って受取った小包には、二枚のレコードが入っていた。差出人はナポリ在住のC夫人である。一枚は例のフニクリ・フニクラを始めとするおなじみのナポリ民謡、他の一枚には、トスカニーニが指揮するレスピーギの『ロ

ーマの松』などが収められていた。

C夫人はナポリの詩人だが、実は私はその面影もさだかには覚えていないのである。

というのは、私が彼女に出会ったのは数年前の夏の初め、ナポリ湾上にかぶ小島であった。

あてもなく歩くその町の偶に小さな画廊があったので、退屈しのぎにとちょっとのぞいてみると、それはそこにいた婦人の夫の作品であり、その婦人も詩人ということで、私に一冊の詩集が手渡されたのであった。

ナポリの詩人はその自然をこよなく美しく飾る、とゲーテもいうが、私はその島の魅力を讀えたその詩に心を惹かれるままに一節を口ずさむと、彼女は私にその抑揚を教えたりして、いたく満足の有様だった。

それからというもの、ゴールドメダルを得たという詩集などが時おり夫人からもたらされるようになり、彼女には理解すべくもないが、その幾つかを和訳して送ることが、彼女の好意——というよりもむしろふとしたことから生まれた共感ともいべき

ものに対するささやかな確認のしるしのようになっているのだった。

その後、暫く彼女からの便りがとだえていたが、私は別に気にもとめなかった。

久しぶりに受取った手紙は、『この私の悲しみを……』という言葉に始まり、夫を最近失った涙に満ちたものであった。

私は夫人への慰めにもと、彼女の詩について思い出などを記した小冊子を送ったところ、その返礼にと贈られたのがこのレコードである。

わが国でも、ナポリの唄やトスカニーニの音楽はいくらでも店頭に並んでいる。

しかし、たまたま私の小文のタイトルの一つに『ローマの松』というのがあったためだろうか、その曲をトスカニーニの歴史的録音で送ってくれた夫人の豊かな感情に溢れた、いかにも南欧人らしい心が、その音盤から滲み出てくるかのように思えるのだった。

いろいろな物質が、あまつさえ騒音までも伴って溢れる一方で、人と人との豊かな感情の交換を惜しみ、見知らぬ者は敵であるかのように口を閉ざし、言葉という

ものを宣伝のための饒舌か喧嘩の手段としか考えないこの地にあつては、一瞬の出会いを大切に、豊かな言葉に華を開かせることの価値を今さらのように感じるのである。

縁あれば千里、すなわち縁があれば千里も離れているような思いもかけない人にも会い、深い関係を持つようになる、というが、C夫人の面影は失われた今でも、その快い印象と共感は、レスピーギの音楽という形をとって、はっきりと蘇ってくるのである。

(大学法学部教授・行政法総論・演習)

## カルガンの

### 思い出

岡谷 元治

国交が回復していろいろ、日本と中国の親近感は深まりましたが、航空協定が締結されると、東京から三時間ほどで北京に行けるかも知れません。三十数年前に、私は神

戸から船で天津經由、北京まで四日がかかり行つたものです。その後の数年間は中国の北部で過ごしました。蒙古政府の官僚として、最初は經濟部で為替管理に携わり、後には外交官として北京に駐在したのです。

蒙古政府は漢・回・蒙の複合民族国家と称していたけれども、その実体は徳王(トムジュクドンロップ)を主席とする。日本の傀儡政権に過ぎなかつたので、日本の無条件降伏に伴つて砂上の楼閣のように消え去り、私は北京生まれの娘と共に着のみ着のまま、引揚げることになりました。

蒙古政府の首都張家口(蒙古名カルガン)は河北省の北、察哈爾省にあり、北京から八達嶺を越えて、北西へ汽車で八時間ほどの距離でした。八達嶺を通る万里の長城は、長城の中で最も北京に近い故か、最も荘大でしたが張家口の北側を通る外長城線はこれよりは小規模のものです。長城は北狄を防ぐ漢民族の砦として構築されたものですが、次第に漢人勢力が北進して、外長城線の北にまで進出するようになりました。

張家口を通る外長城線の「大境門」は、

蒙疆に入る表玄関ですから、大境門の内外には旅蒙商(食糧・衣類・雑貨を蒙疆に輸出し、奥地から毛皮・羊毛などを輸入する商人)の店舗や宿舎が密集し、陸の港を意味する蒙古語のカルガンは張家口の別名になっていました。

地味肥沃で四季の変化に富む日本とは異なつて、朔北の地カルガンは、冬が長く、その間草は枯れ、葉は落ちて万目蕭條、見渡す限り山も街も黄塵にまみれ、キナムマブシの有様です。とくに蒙古風の吹く二月から四月までは、雲一つない空の澄み切つた日でも、一たび烈風が吹き始めると、一瞬にして黄塵空を覆い、天日為に暗く、目にもとまらぬ砂の微粒子は二重窓を通して部屋に舞い込み、風の通路では一夜のうちに数尺の砂山が現出することもたびたびでした。

しかし張家口も、地形だけはこよなく京都に似ていました。東・北・西には、高くはないが連峰が続き、開けている南に向つて、街の中ほどを鴨川ほどの川幅の河が流れています。ただ水深が深く、濁っているので、濁水滔々、「清水河」という名に反

しています。冬期にこの河は堅氷に覆われて荷馬車の通路となり、われわれのスケートリンクになりました。

長城の外には日本のような森や林はなく一面の荒野ですが、清水河の上流一キロの所に「宗哲元の森」があり、張家口司令宗哲元の別荘の後として数百株の柳が繁っていました。また張北街道のかたわら、「賜児山」中腹の娘々廟には泉があり木立もあって、樹木に恵まれない市民たちがここに幌馬車で集まって清遊するのです。

(大学経済学部教授・東洋経済史)

## 思うこと

福本 一

青葉も目にしみる頃になると、学校中があわただしい新学期の行事を終えて一息入る頃である。

最近、会社で女子社員が小走りに廊下を

走っている姿を見て、ああ、これが現代の日本の象徴であると思うという趣旨の文をみかけたことがあるが、廊下ぐらいいはゆっくり歩きたいと思う。それにしても、最近交通の混雑から、烏丸線の込みようはひどい。私が学生の頃、バスは10分少々で今出川から京都駅まで行けたものである。それが今では30分から40分もかかるようでは、立錐の余地なきところに身をまかせていると、途中の四条あたりで降易してしまう。毎日通学する者にとっては大変な仕事である。今年の新入生のチュートリアルの際に、第一週の授業を送った感想を聞くと、大阪から通う学生は、往復四時間近い通学で、ぐったりするとのことであった。一刻もはやく、地下鉄の工事が始まることを祈るばかりである。

私の住む奈良市からも、年々次第に同志社に通学する学生・生徒が増えている。私と同社に通勤し始めた頃は、奈良電といつて、路線も悪く、震動もげしく、フルスピードの車の中で、はらはらさせられることが多かったが、近鉄になってからは大型車両になったこと、路線の改良などで

大分よくなったのは、ともかく有難い。

奈良を北上して、左右の展望は美しく、東に連なる山の峰と、西に広がる広大な平野を眺めて、すばらしいと思う。人はなぜ遠くの距離にあるものが美しいと感ずるのであろうか。人間の本性に、脳内に、ある種の美的ボタンとでもいうべきものが内在していて、そのようなものに、目から送られる刺激が感応する時に、美しいと思うのかも知れない等々、想いをめぐらしながら通勤していたが、近年、おびただしい開発の波がここにも押し寄せ、新しい駅が作られて、平城団地が生まれ、その他民間のデベロップの住宅建設によって、住宅群がこつぜんと出現した。この分では、いずれ奈良から京都までは京奈(？)ベルト地帯が形成されるのも間近いであろう。すると、電車は人の波を一杯、二杯と運搬する容器に変わる。

交通難は、どのみち、止まるところがない運命となっているのであろうか。

せめて勤め先で廊下ぐらいいは、ゆっくりと歩きたいものである。

(女子大学教授・英語・英語学)

## 野村仁作学長の

### 墓参をして

高橋 勘

昭和十三年一月中頃、東京YMCAで初めて同志社中学学長野村仁作先生に御面接し、即刻同志社中学に捧職することが決定しました。三十五年も昔のことで、私と同志社の関係は野村学長により封切られた、いわば大恩人でございます。

そんなわけで、私は五年目ごとに瀬戸内の小島の先生宅を御訪問し御挨拶申しあげるのが楽しみの一つでございます。第一回のときは、先生御病床でございますが御健在でした。このときは中堀先生と御一緒、密柑の花の美しい小島の海をボンボン船にゆられて参りました。二十数年も昔のことでございます。その次からは墓参となりましたが、奥様といろいろな昔話をして「喝」をいられ、そのあとでお墓参りをしました。もちろんお留守の時も二度ありました。そんな時一人ぼっちで、「野村家

祖先之奥津城」とある、五十糶角、二米五十糶の大理石に肩をもたせて、美しい裏山にかかる上弦の月を仰いで、お祈りをしたこともあります。

さて、一月十三日、五度目の御挨拶に参上しました。奥様は元旦には急を告げるほどの御病氣だったそうで、病床におられましたが、元気に起きてこられ正装して写真に入って下さいました。学長といえは今は大学長のことでございますが、戦前は中学校長のことで、あの頃は野村先生の固有名詞になっていました。海軍大佐で御退官になった方で、生徒からは「ハイカン先生」と親しまれた方です。奥様は、当時の同志社のことを手にとるように御記憶になり、中学のことはもちろん、大塚、片桐、湯浅の諸先生、村田校友会長、千宗室氏等々に



野村 和様と

ついて三時間ばかり語りました。そのあと先生の墓参をして、すがすがしい気持ちに満たされ、フェリポートにゆらりゆらりゆられて糸崎につきました。糸崎より生口島の瀬戸田へ、瀬戸田は西日光といわれる観光地です。瀬戸田から約五軒、バスで約十五分で名荷村に着きます。村で野村先生宅と申せば誰れ知らぬ者はありません。今度は京都から車を運転して参りました。昔と大へんぼうをし、道は太く舗装され、海岸は工場が連立しました。でも山側は美しい密柑山で、海もまだまだ青く澄んでいました。同志社のすべての方々によるしく、この奥様の心からなるお言葉をお伝えします。先生に関係のある方、何卒小島のお墓へお参りになり、奥様を御訪問なさればどんなにかお喜びのことでございます。八十才になられた奥様は、今も言葉の不自由なお手伝いの野上あいさんとただ二人のお暮しですが、心から迎えて下さるでしょう。そして自作の密柑と新鮮な瀬戸内の刺身とを御馳走して下さいましょう。

(高等学校教諭・数学)

(野村和様(千七二二)広島県豊田郡瀬戸(田町名荷(電〇八四五二七一二五〇九))

## 新島 襄と

「皇張」ということば

楠 木 路 易

この春、私の学校（香里）では「教育研究誌」が創刊のはこびをみた。はずかしいことであるが、私は例によって「自由民権運動と新島襄」という小論を発表した。そのため勉強のなかで、新島襄のことばづかいといったものについてなにかと考えさせられることがあった。そのひとつに「皇張」ということばがある。

「皇張」ということばはまず使われることばではない。私は学校の図書館で、あるかぎりの辞典・字典類をしらべたが全然でこなかつた。ただ、字典類で「皇」の意味に、「ひろし（弘）」・「おおいなり（大）」・「さかんなり（盛）」という意味が書いてあるので、「皇張」ということばは、「おおいにひろまる」という意味と考えてまち

がいてはないとわかつた。

ところで、この珍らしいことばを新島襄はたびたび使っているのである。

気がついたものを年代順に列挙すると、

①昭和16年5月、第3回日本基督教信徒大会における説教稿、「基督教皇論」（新島研究№5）中に2ヶ所。

②昭和15年7月14日、安中養蚕所での演説稿、「文明の元素」（新島研究№6）の中で、文明の4元素の一つとして「自由の皇張」をあげている。

③明治16年12月31日付、有名な板垣退助宛書簡（新島先生書簡集）中の「……小生は多年耶穌教を信じ、且つ該教皇張を以て一生の志願と……」というところ。

④明治17年8月16日付、新島八重宛書簡（新島先生書簡集）の欄外にスイスが小国ながら自由を維持しているのは「……教育を盛んに皇張するに由る」としている。

⑤明治19年10月31日、同志社における説教稿、「御国を臨ませたまえ」（新島研究№13）中の「……神は福音の伝播、

御国の皇張を……」というところ。

⑥明治21年1月12日における勝海舟との談話（新島研究№10）中の「耶穌教皇張も、陽に敵をつくる勿れ。……」という日記文。 以上

実は私は新島襄研究を志して以来早くからこのことばが気になっており、ずっとこれは新島襄独創のことばだろうと考えていた。ところが、冒頭のように今回いろいろ勉強するうちに私の不明を知らされた。たとえば、小崎弘道が「……堂々基督教の真理を皇張せしかば……」（六合雜誌・明治15年1月号）と使っている。小崎の場合には新島襄の影響を承けて「皇張」ということばを拝借したとも推測できる。しかし、板垣退助編「自由黨史」（岩波文庫）中の「……自由主義を皇張するに方や……」（中巻114頁）という文を見てはもはや新島襄独創語とはいえない。

ただ、ますます恥の上塗りになるかもしれないが、それでも、これは新島襄を特徴づけることばの一つだと考えていいのではないか、と思うがどうであろうか……。

（香里中・高教諭・政経）